



<書評>

「明治の特許維新 —外国特許第1号への挑戦!—」

櫻井 孝 著
発明協会 刊

明治16年、我が国が未だ特許制度を整備しない時期に、米国に特許出願し事業に活用していた日本人がいた。本書の第一章は、その日本人平山甚太が発明を出願してから特許が成立し、権利期間が満了した後に自らも息を引き取るまでの経緯が、克明に記されている。膨大な歴史的資料を渉猟し、明治期の発明家の半生をありありと描くその筆致には、この激動の時期を生きた一人の発明家に対する深い愛情を感じる。しかし、対象への愛だけではない。高橋是清の遺稿をはじめ、当時の公信を記録したマイクロフィルム、米国特許出願の包袋記録等を丹念に読み進め、明治前期の社会情勢を特許制度の観点から再構築しつつ、平山甚太に関する事実の欠片を拾い集めて一步一步真実に近づく展開は、あたかも迷宮入りしそうな事件の真相を探偵が探る推理小説を読んでいるようであり、最初のページをめくったが最期、中断できなくなるほどに引き込まれる魅力に満ちた作品に仕上がっている。

本書の著者、櫻井孝氏は現在特許技監であるが、特許畑を一貫して歩み、執筆当時は、経済産業省特許庁特許審査第四部長を務めていた現役の行政官である。多忙な公務の合間を縫って、このような膨大な資料と格闘し、明治前期の発明家にスポットを当てた偉業に、この場を借りて敬意を表したい。

第1章 ある煙火師の米国特許物語(日本人の米国特許第1号)

第2章 ある化学者の英国特許物語(日本人の英国特許第1号)

第3章 外国人の日本特許第1号誕生物語

(紹介者 鈴木公明)